慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	即興的な音楽演奏を可能にする基盤的専門知の社会学的解明
Sub Title	
Author	吉川, 侑輝(Yoshikawa, Yūki)
Publisher	慶應義塾大学大学院社会学研究科
Publication year	2020
Jtitle	慶応義塾大学大学院社会学研究科紀要 : 社会学心理学教育学 : 人間と社会の探究 (Studies in sociology, psychology and education : inquiries into humans and societies). No.90 (2021.) ,p.82- 86
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	2019年度博士課程研究支援プログラム研究成果報告
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00069957X-00000090-0082

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

即興的な音楽演奏を可能にする基盤的専門知の社会学的解明

吉川侑輝

1　研究成果実績の概要

申請者は「即興的な音楽演奏を可能にする基盤的専門知の社会学的解明」という研究題目のもと，博士課程学生研究支援プログラムからの助成をうけた（2019年4月～2020年3月）。本稿は，その研究成果報告である。

本研究の目的は，音楽の即興演奏において用いられている専門的知識を経験的な調査をつうじて解明することである。こうした目的を遂行するために申請者は，エスノメソドロジー（Garfinkel 1967）的な相互行為分析をつうじて，実践の内部から即興演奏における方法の知識（ライル1987）の解明を目指している。本研究は2年計画であり，本年度はその1年目にあたる。2年全体の計画としては，即興における方法の知識を特定することで，従来の教則本にはない実用性を備えたインストラクション（演奏のためのマニュアルなど）を作成することが目指されている。

2　対象と方法

2019年度の助成期間終了時までの目標は，その基礎的作業として，音楽家たちの演奏の正確な記録とその断片を収集することであった。具体的には，以下の手順でおこなわれた。

申請者はまず，職業的音楽家を対象として即興演奏をMIDIデータによって，電子的に記録することを試みた。KORG社製のシンセサイザーPA1000を用いて，調やテンポの異なるブルース・スタイルやファンク・スタイルの即興演奏用のマイナス・ワン・トラック（伴奏トラック）を，4つ作成した。以下，それぞれをトラック1-4と呼ぶ（表1）。

表1　事前に作成したトラック

トラック	スタイル	調／コード	拍子	テンポ（BPM）	形式	長さ
1	ブルース	in C	4/4	150	前奏（13小節）＋伴奏（12小節×4回）＋後奏（10小節）	1m 56s
2	ブルース	in F	4/4	90	前奏（12小節）＋伴奏（12小節×4回）＋後奏（13小節）	3m 23s
3	ファンク	on E7	4/4	129	前奏（9小節）＋伴奏（16小節×4回）＋後奏（8小節）	2m 35s
4	ファンク	on A7	4/4	110	前奏（6小節）＋伴奏（16小節×4回）＋後奏（6小節）	2m 50s

つづけて申請者は，音楽家たちに，この伴奏に基づく即興演奏を依頼し，それを記録した。手順としてはまず，音楽家に対して，伴奏として利用するトラックのスタイル，調／コードの情報，拍子，テンポ，そして形式などを伝えた。そのうえで演奏を希望するトラックを選択してもらい，演奏をしてもらった。なおこの度準備したトラックは，古典的なブルースやワンコードのファンクといった慣習的によく知られた形式をもったものであるため，楽譜の準備などはしなかった。また音楽家たちの演奏は，PA1000においてMIDIならびにMP3の両形式において電子的に記録されただけでなく，必要に応じて運指などを参照することができるよう，その演奏における振る舞いを，ビデオカメラを用いて記録した。

併せて，音楽家の専門性や経歴を尋ねるためのアンケートをおこない，背景的な情報を収集した。なお音楽家に対する調査は予め「調査趣意書」を作成のうえ十分に理解を得，同意書への捺印をしてもらったうえで実施した。さらに音楽家たちには，事前に金額を提示したうえで，謝金を支払った。

なお現時点では，2名の音楽家たちに対して，演奏の記録を完了している。ひとり（Aさん）は職業的なジャズ・ミュージシャンであり，もうひとり（Bさん）は，東京都内の音楽大学に在籍している大学生である。前述のアンケートにもとづけば，いずれの音楽家も，演奏活動と音楽レッスンの両方において収入を得た経験をもっている。なお以下の表2に示すように，Aさんの方は，1–4すべてのトラックにおける即興演奏を，そしてBさんの方は，1-3のトラックにおける即興演奏を希望した。

表2　記録された演奏

トラック	Aさん	Bさん
1	○	○
2	○	○
3	○	○
4	○	×

申請者は現在，記録された演奏をデジタル・オーディオ・ワークステーション（DAW）や楽譜作成のアプリケーションなどを利用しながら，演奏の書きおこしならびにデータの整理を行っている段階である。なおデータの一部については，分析をすでに開始している。分析に際しては，エスノメソドロジー研究，音楽学，音楽社会学，そして民族音楽学にかかわる文献資料なども参照しつつ，これをおこなっている。

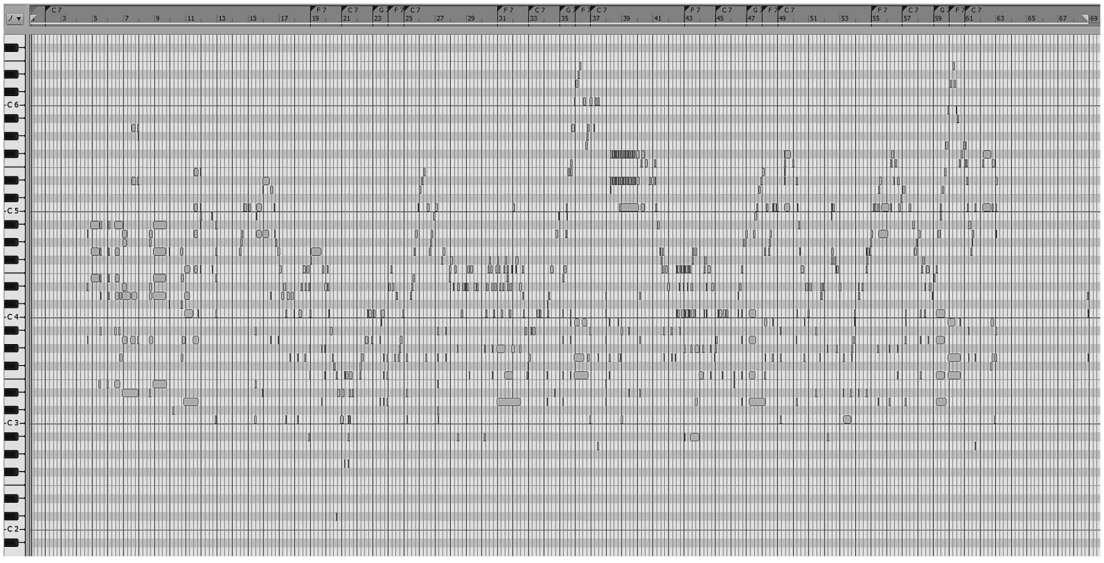

図1　トラック1における即興演奏（Aさん）

3　結果

3.1　和音と旋律の編成

図1には，記録をおこなった演奏のひとつ（A さんによるトラック1における即興演奏）が掲載されており，その中で，旋律や和音が奏されていることが観察可能である。以下では，図1において観察可能な，発音を共時的／通時的に結び付けていくことによって旋律や和音を編成するいくつかの方法について，現時点で可能なひとつの観察を提示する。

まず，開始時点である単音が発音され，そのまま終了したとき，一音のみが弾かれたように聴こえる（図2）。同じく，開始時点で2つ以上の音が発音され，そのまま終了したとき，重音が弾かれたように聴こえる（図3）。こうしたやり方は，典型的には，和音などを用いてコードを弾くときに，利用される。

図2

図3

単音であれ重音であれ，発音の終了のあとに続けて発音が行われると，発音それぞれの発音同士が連鎖を構成しているように聴こえる（図4）。この方法は，旋律やコード進行のどちらを構成するときにおいても利用可能である。すなわち，この技法を単音を連鎖するさいに用いるならばそれは，旋律のように聴こえる。また，同時に2つ以上の音が発音されているものが連なるときには，重音が連鎖しているように聴こえる。

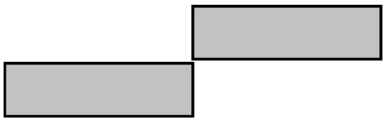

図4

3.2　編成のバリエーション

1度に1音であれ，2つ以上の音であれ，連鎖は，間隔をあけずに続けて行われるとは限らない。多くの場合それは，分離しながら連鎖していく（図5）。あるいは，間隔を開けるのではなく，反対に，発音同士を重ねながら結び付けられるときであってもなお，発音が連鎖しているのを聴くことができる（図6）。

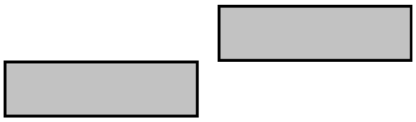

図5

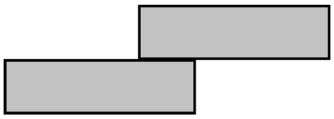

図6

だがしかし，重ねられた発音が，常に連鎖の開始として聴かれうるというわけではない。例えば，先行する重ねられた発音と後続する重ねた発音が同時に終わるときは，今度は一連の発音が，重音としてなされたように聴こえる（図7）。反対に，先行する重ねられた発音に後続する重ねた発音がなされたのち，先行の発音のみが残った場合，その先行する発音のみが残されたように聴こえる（図8）。

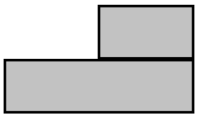

図7

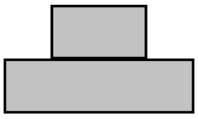

図8

以上のことは，発音がどのような発音としてなされたかということが，その発音がいかにして開始されたかというよりはむしろ，いかにして終了したかということにかかわっていることを示唆しているであろう。実際，同時に開始された重音の一部が取りやめられた場合，残った音こそが主となる発音であり，取りやめられたほうの発音は，それを装飾したりそれに付随したりするような音であるように聴こえる（図9）。

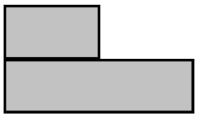

図9

以上の観察はあくまでも，簡素かつ初歩的なものに過ぎない。しかしながら，和音や旋律という音楽の基盤を形作る現象の理解可能性がまずは演奏という活動のただ中において，音楽家たちが従事する具体的活動を通じて生み出されているということを想起させるものとなるであろう。

4　成果の公表

本研究における成果の一部は，日本エスノメソドロジー会話分析研究会春の研究例会（2020年3月，於慶応義塾大学）ならびに日本文化人類学会第54回研究大会（同年5月，於早稲田大学）において公表

予定であった。このうち，日本エスノメソドロジー会話分析研究会には自由報告のエントリーを行ったものの，新型コロナウィルス感染症の流行にともない，開催が中止となった。日本文化人類学会についてはエントリーが受理され，オンラインでの個人発表が決定している（題目：「活動のなかのラインズ――音階の社会的編成」）。

文献

Garfinkel, Harold. 1967. *Studies in Ethnomethodology*. Prentice-Hall.
ライルギルバート．1987．心の概念．Translated by 坂本百大，宮下治子，and 服部裕幸．みすず書房.